最悪のBad End

ＦＯＯＬ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
最悪のＢａｄ　Ｅｎｄ

【Ｎコード】
Ｎ５１６０Ｙ

【作者名】
ＦＯＯＬ

【あらすじ】
もし、貴族アンチが成功した世界で貴族達が生き残ってたら？もし、自分よりも強い力を身につけたら？
これはそんなお話です。

哀しみへ続く交響曲（ｓｙｍｐｈｏｎｙ）（前書き）

はじめまして。そうでない人もいるかもしれませんがＦＯＯＬです。

哀しみへ続く交響曲（ｓｙｍｐｈｏｎｙ）

……あの日までは、父上がいて、母上がいて、兄上がいて、弟がいて、自分と共に同じ道を歩んでくれる皆がいる、幸せに満ちた時間がいつまでもいつまでも続いていくのだと心の底から信じきっていた。これからも、その道を歩んでいくのだと疑っていなかった。

……誰が予想できただろうか？あの幸せに満ちた時間が砂の城みたいに儚く崩れ去ってしまうときが来るのだと……。誰が想像していただろうか？幸せな時が蜃気楼のように消え去ってしまうなどと。

哀しみへ続く交響曲（ｓｙｍｐｈｏｎｙ）（後書き）

このお話には、読んで下さる皆さんへの言葉のつもりで書きました。

破滅への前戯曲

自分の名前は、カルマ。信じてもらえないかもしれないが転生者だ。事故で死んだと思ったら、気が付いたらゼロの使い魔のゲルマニアの王家に転生していた。やったと思った。なぜなら、貴族もプリミル教も大嫌いだからだ。貴族ばかりを優遇し、平民を家畜のように扱う。そんな連中が許せなかったからだ。だから、ガリアもアルビオンもクルデンホルフトリスティンの貴族連中も、ロマリアの神官と教皇どもを上から下まで根絶やしにしてやった。それから数年たった、あの日のことだ。

あの日、ゲルマニアの北端で叛乱が起きた。直ぐに軍を差し向けて鎮圧したが、また叛乱が起きた。
それを鎮圧したら、またすぐに別の叛乱が起きる。その繰り返しで、兵達は疲弊していた。

このままでは不味い。そう思うが、頼れるもの達もいない。』

泣く泣く自分達だけで叛乱者達と戦わなければならない。

わからない。何故、皆が自分達から離れて行くのか？何故、平民達が叛乱を起こすのか？

……どうしてこんなことになってしまったのだろうか？

……空に雲が覆い始めた。

崩壊への鎮魂歌（ｒｅｑｕｉｅｍ）（前書き）

アクセス数を見てみました。１０００越えしていたことにビックリ仰天です。
アクエリアス１様、ヘルマスター様、感想ありがとうございます。

崩壊への鎮魂歌（ｒｅｑｕｉｅｍ）

「た、大変です！カルマ様！」

叛乱軍達の対処に追われていた時、混乱した表情をした父上の部下が駆け込んできた。

「どうした！？何があった！？」

「『貴族再生結社』なる組織が攻めて来ました！！」

な！貴族社会を滅ぼした時に流しきったはずの膿がだと！！

「それで、敵は！」

「よ、４人です！」

「それなら、蹴散らせるだろう！」

「そ、それがどんな攻撃も通じないんです！それどころか、全部自身に返ってしまうのです！」

なんだと？

「お前は父上に知らせに行け。私はそいつらを食い止める！」

そう言って、軍隊を率いて出撃した。

教えてもらった場所は広い草原だった。その草原に４人の人がいる。自分がわかるのはその一人モンモランシーだけだ。

「……おやおや。ゲルマニアの次期皇帝陛下がわざわざこんなところまで足を運んで頂けるなんて恐悦至極。」

４人組の１人、金髪のロールした女が言葉だけの敬意を払ってそう言った。

「まだ名乗ってなかったわね？
私はモンモランシと言うわ。
もっとも覚えてもらわなくても結構だけどね。野蛮人に呼ばれただけでも耳が腐るもの。」

チッ！！初めて会ったが、ここまで高慢ちきな糞女だとは思わなかったぜ。

「よく生きてたな？」
「エエ。魔法学校を攻めてくる寸前、それを察知したギーシュが必死に私とケティを逃してくれたおかげでね。」
「その途中でギーシュ様は私達を護る為に戦い、亡くなりましたけどね。」

ハルケギニアでは珍しい黒髪の女が瞳に暗い焔を讃えてつげる。

「それからわ、大変だったわ。このままだったら父様達が危ないから慌てて、駆け付けてみたら、家は燃えカス生きているのが絶望的だったのよ？」

再び、モンモランシーが言う。過去を懐かしむように、そして、愉快そうに。

「その中で知ったのよ。貴族達の虐殺を行なったのがゲルマニアで、決行したのが貴族達の平民の扱いが悪すぎるから殲滅して、解放しようっていうじゃない？」　そこまで言って鬼のような形相になり叫び始めた。

「ふざけるなっッッッッ！！！！！！！！！平民はただ、貴族達に従っていれば良いのよッ！！！！！！！！」

すぐに表情を元に戻す。

「……まぁ、おかげで、面白いことを教えてもらったからね。お礼に教えてあげる。貴族再生結社・ルネサンスの力をね。」

そう言ってモンモランシーは杖を振り上げる。させるか！！モンモランシーが杖を振り下ろすより早く予め唱えていた魔法を解き放つ。

「業火球（フレア・ボール）！！」

巨大な炎の塊がモンモランシーを襲いかかる。しかし、それより早く、割り込んだ人物がいる。そいつに触れたと思った次の瞬間、自分が放った魔法が自分自身に牙を剥いた。

予め情報を聞いていたので慌てず対処した。

「……モンモランシー。油断はするな。追い詰められた鼠は猫でも噛むぞ。」

「そうね。助けてくれて、ありがとう。マルコ。」

な！コイツがマルコ？嘘だろ？だって、

「太ってないじゃん。」

「イヤ、気にするところはソコじゃない。」

思わず、だした声に本人が律義にツッコミを入れた。その後で教えてくれた。

「あの後、ルネサンスに加わって血ヘドを吐く想いで力を蓄えたんだ。大変だったよ。太る暇なんか無かったし。」

『イヤ、お前はそのままでいろ。』

マルコの一言に敵味方を問わず皆が突っ込んだ。

「そんなことはさておいて、父様達の仇は打たせてもらうよ？」

「させるかよ。だいだい、そっちの『反射』のカラクリも理解しているんだからな？」

「へぇ？」

その言葉にマルコは愉快そうに表情を歪めた。

コイツが反射してみせた瞬間、空気が揺らいで見えた。

「反射（カウンター）の正体、それは突風。」

「ご名答。初見でボクの反射風（アゲインストウィンド）をよくわかったね？」

マルコは自分のカラクリの正体がバレたにもかかわらず、拍手しそうな雰囲気で答えた。

「皆総攻撃！」

その言葉に、皆がいっせいに魔法を解き放つ。いくらなんでも、この総攻撃を反射出来るわけがない。そう、思ったが甘かったようだ。マルコはその攻撃全てを返してしまった。

「な……。」

驚き、何も言えない状況でモンモランシーがマルコに苦情を言う。

「ちょっとマルコ。私にも遊ばせてよ？」

「油断はするな。」

「わかってるわ。」

モンモランシーはマルコに告げてから、自分達の少し前まで歩いてきた。

「今からルールを言うわ。今から３０分以内に私にキズを付ける事が出来れば、あなた達の勝ち。私達はこの場は引き下がるわ。出来なければ私の勝ち。あなた達には死んでもらうわ。」

モンモランシーが後ろに控えている女に目配せすると、頷いて、錬金で、巨大な砂時計を作った。

その様に薄く笑ってから宣言した。

「じゃ、用意、スタート！」

その言葉に砂時計が逆さになり、砂がサラサラと舞い降りる。

「業火球（フレアボール）！！」

自分の攻撃がきっかけとなり、皆がモンモランシーに攻撃した。何が『油断しない』だ。こんなルールを決める時点で油断している証拠だ。

「……で？」

何事もなかったかのように問いかけるモンモランシー。その周りを水の膜のようなものが覆っていた。

「な！なんだと！」

その姿に驚いてしまう。あんな防御が出来ると言うことは恐らく、ルネサンスの幹部クラスであっているのだろう。

「勘違いしているかもしれないから言うけど、私達はルネサンスの中でも最弱よ？」

な、なんだと？

「わかる？つまり、私達に勝たなければルネサンスと戦う資格なんか無いのよ？」

「ふざけるな！」

叫んでから攻撃するが、その総攻撃、その尽くを防ぎきってしまう。

「……フン。野蛮人の力なんて所詮こんなものね。」

モンモランシーの言葉に切り札（ジョーカー）を切る事にした。火・火・火・火・火。火が5個。スクウェアスペルを超えた膨大な炎が荒れ狂う。その膨大な炎を制御して一点に集中する。炎が集束するに連れ、その色が、変わって行く。最高に高いはずの白炎。それさえも越えて、金色に輝く。

「へぇ。」

モンモランシーはコレを見ても、意外だとばかりに微笑むだけだった。

「……まだ、油断しているのか？その口を永遠に閉ざしてやるよ！」

「皆のもの！カルマ様を援護するんだ！」

副官のその言葉に切り札を放つ。

「極炎弾（フレア・バレット）！！」

金色の弾丸がモンモランシーに襲いかかる。さらに、副官が風を、他の人達が炎を放つ。風が炎を巻きこんで、金色の弾丸に絡み付き更に高温になる。そして、

「油断？何の事よ？これは、余裕というやつよ？」

「バ……バカな！」

モンモランシーは氷の盾で金色の弾丸を防いでいた。

「ちょっと驚いたわね。まさか、あんなものを持っていたなんて知らないし。」

当然だ。敵で知っているのはこの世にいないし。

「モンモランシー。時間だ。」

砂時計を作った女が砂時計を指さしモンモランシーに告げた。その砂時計は落ちきっていた。

「あら？もうそんな時間？それなりに楽しめたし、死んでね。」

モンモランシーは少し残念そうに言って杖を振り上げる。

「呼吸を合わせろ！」

マルコとモンモランシーは同時に詠唱を始めた。

「なんだと？」

想像以上に系統を足してその恐怖におののいた。

水・水・水・水・水・水・水・水・水・水。

風・風・風・風・風・風・風・風・風・風。

水が１０個と風が１０個

。その凄まじい力が一点に集まる。そして、

「「永久氷棺（エターナル・コフィン）！！」」

水と風の混じった霧が発生してこの場を包んだ。そして、

「永遠に眠りなさい。聖母に抱かれてね。」

モンモランシーのその言葉に兵士達は綺麗な女性の氷像に姿を変えた。無事だったのは自分と幾ばくかの兵士達だけだった。

「さて、次は私ですね？」

ケティは砂時計女に目配せしてから詠唱する。

火・火・火・火・火・火・火・火・火・火。

土・土・土・土・土・土・土・土・土・土。

火が１０個に土が１０個。その２つの力が一点に集まり、全てを溶かし尽くす力が生まれる。

「「熔岩波（ラヴァ・ウェイブ）！！」」

全てを溶かし尽くす力が生まれる。

「「熔岩波（ラヴァ・ウェイブ）！！」」

二人が生み出した熔岩が自分達を襲う。それを副官達が防御壁を作って受け止める。

「お、お前達！」

「カルマ様！！お逃げ下さい！！」

バカな！出来るわけ無いだろう！

「このまま戦っても全滅は必至。ならば、一番勝率が高い人に逃げてもらうしかないです。」

「だ、だが！」

「このまま、皆死んで貴族社会に戻ってもよろしいのですか？」

その一言に重い沈黙がのしかかった。

「すまない！！皆！！」

そう詫びてこの場を逃げ去った。

「……あ……。」

自分は目の前の光景が信じられなかった。自分達が出撃するまでは、たくさんの人達がいて、笑い合い、時には怒ったり、愛し合い、

素晴らしい1日を過ごしていた。

でも、今の街は廃墟と化して人々は無惨な姿に変わり果てていた。唯一無事なのは、城のみ。

この様子だと城は無事でも皆死んでるか、捕まってるかのどちらかだろう。

いますぐ、父上や母上、家族の皆を助けたいが、ルネサンスの力は強大だそんな事をしても犬死にだろう。自分には、逃げるしかなかった。

逃げている途中で、人に見つかった。……ルネサンスの人達じゃないみたいだし大丈夫か。そう思ったが甘かった。いきなり、石を投げつけられた。そして、

「　　はこの国から出ていけ！」

その一言に凍りついた。何故、叛乱したのかを理解したからだ。ここからも逃げるしかなかった。

どうすれば良かったんだろうか？

空には雨がシトシトと降っていた。

崩壊への鎮魂歌（ｒｅｑｕｉｅｍ）（後書き）

作中に出てきたオリジナルスペルを解説します。

獄炎球（フレアボール）

系統　火・火・火・火

使用者　カルマ

火を４つ足した火炎球（ファイアー・ボール）。

獄炎弾（フレア・バレット）

系統　火・火・火・火・火

使用者　カルマ

自身よりも強敵と闘うために開発した魔法。元ネタはＮＡＲＵＴＯの螺旋丸。火を５つ足した炎を圧縮することにより、疑似的に７つ足した魔法に匹敵させた。

魔法の鎧（マジック・アーマー）

系統　コモンマジック

使用者　作中に派生魔法のみ登場。

魔法を身に纏い、防御壁にする魔法。

水の鎧（ウォーターアーマー）

系統　水

使用者　モンモランシー

水の魔法を身に纏う防御壁。水を足すことで防御は増すが維持するのにより精神を消費する。氷の盾（アイス・シールド）

系統　水

使用者　モンモランシー

水の鎧を盾状にして作った壁。

反射風（アゲインストウィンド）

系統　風

圧縮空気を身に纏い、触れた物を来た方向に噴射することで打ち返す。

永久氷棺（エターナル・コフィン）

系統　水・水・水・水・水・水・水・水・水・水・水＋風・風・風・風・風・風・風・風・風・風・風・風

使用者　モンモランシーとマルコ

水と風を合成して霧を作り、その霧に触れた人を絶対零度の氷の中に閉じ込める。聖母の氷像はモンモランシーの趣味

熔岩波（ラヴァ・ウェイブ）

系統　火・火・火・火・火・火・火・火・火・火・火＋土・土・土・土・土・土・土・土・土・土・土・土

使用者　ケティと？（作中に名前出ず。）

土と火を混ぜて作った熔岩で相手を攻撃する魔法。

絶望への不協和音（ｄｉｓｓｏｎａｎｃｅ）

逃げた。逃走した。ルネッサンスが強すぎた。手も足も出ずに無様に逃げた。

「……ハァ。これからどうすればいいんだろう？」

今の気持ちは無様な敗残兵である。

「どこに逃げればいいんだろう？」

…正直に言ってハルケギニアに居場所はない。元貴族とはいえ、あの連中にあんなことをした自分を許してくれないだろうし、ロマリアに行くにはガリアを通っていくしかない。

「…そうだ。元トリスティン領に逃げればいいんだ。」

タルブ村に住んでいるサイトなら、自分をかくまってくれるはずだ。そう思い、タルブ村に住んでいるサイトのところに向かった。

タルブ村にたどり着いた時には、もう真夜中になっていた。そんな中でも、サイトは快く自分を迎え入れてくれた。

「カルマか！どうした？」

「突然ですまない。かくまってくれないか？」

「いいよ。入ってくれ。」

サイトはそう笑顔で家に招き入れてくれた。久しぶりに来たサイトの家には不思議な違和感を感じた。しばらく見まわして、その違和感に気付いた。サイトは奥さんのシェスタ。それと、しばらく前に受け取った連絡では、生まれたばかりの赤ん坊がいたはずだ。だが、その二人分の生活感が感じられないのだ。

「サイト。シェスタはどうした？」

「あ？ああ。魅惑の妖精亭にちょっと所用があってな。出かけてるよ。」

そういうことか。シェスタもサイトも親バカだからな。片時も離れたくないのだろう。

「長旅で疲れているんだろう？飲め。」

そう言って、サイトは湯気の立つカップといい香りのする紅茶を差し出してくれた。

「サンキュー。サイト。」

そう言って、自分はその液体を一口飲んでしまった。

「普通の紅茶より、ちょっと苦み強いけど、何か使ってるのか？」

「わかる？リッグスの実をすりつぶした奴だ。」

な？リッグスの実だと？その実は強力な睡眠作用を持っているん

だ。案の定、すぐに眠気が襲ってきた。
「な、なにかんがえ…てやが…る？」
「悪いな。カルマ。お前を捕まえればルイズが褒めてくれるんでな。」
な？ルイズだと？
「さ、…サイ…トおま…えも…ルネサ…ンスの…」
肯定する笑みを見ながら、自分の意識は闇に落ちた。

「…う…。」
呻いて目を覚ました。
「…知らない…天井…だ。」
さっきまでの木製の家とは全く違う、部屋の中で寝ていた。両手を縛られていて、杖や、杖として使える指輪なんかも取り上げられているみたいだ。
「おや、起きられましたか？」
ドアを開けて、サイトと一緒に入って来た男が問いかける。
「ここは？」

「トリスティン城です。私は、元ゲルマニア皇帝陛下とその家族の処刑を務める事になりました、キールと申します。」

「トリスティン？今はゲルマニアの一部のハズだが？」

一応わかってはいるが、問いかけてみた。

「ゲルマニアなど、既に過去の遺物。滅んだ、今はトリスティンですよ。」

「良くゲルマニアの皆が納得したな？」

「あぁ。ルネサンスの水のメイジ達の魔法で洗脳しただけですよ。水の流れを操作して、頭の中身を我々に従うことにのみ悦びを見いだせるように決して逆らう気力を出せないようにね。」

まさか、そんなことまでしてたとはな。ってまさか、

「あの叛乱はお前達が洗脳して起こさせたのか？」

いくらなんでも、タイミングが良すぎた。あっちこっちで叛乱が起こるなんて。

「イエ。あのときは洗脳してません。せいぜい、自分達が言ったことが本当だと信じさせた程度です。そうした上で、あなた方が女性貴族達にしてきた事、慰安と称して、××してきたことを教えて差し上げたんですよ。」

何て事はないかのようにキールは答えた。

「後は、このことを知った自分達をゲルマニアは生かしてくれない

だろう。生きるためには、ゲルマニアを潰すしかないともっていったら、皆が皆面白い具合に叛乱してくださいましたよ。」
心底愉快そうに教えてくれた。
「あの時から、あなたを、あなた達を捕まえたかったですよ。あの時の私が以下に愚かで父が優秀だったかを教えてくれたんですからね。」
『あの時は自分は愚かだった』
そうもらして、自身の過去を語りだした。
「あの頃の私は、父の考えを理解できず、父と衝突ばかりしてました。でも、あの日多くの貴族達が捕まり、裁判にかけられました。」
その裁判の結果、捕まった貴族達は全員死刑。
「そう。私の父も母も、生まれたばかりの弟でさえも死刑になりました。
もちろん父も母も抗議したそうですよ。『生まればかりで悪いことは何もやって無いのに死刑は酷すぎる。』
その時のあなた方が言ったことは覚えてますか？」
「確か、上に立つものには相応の義務があり、その義務を果たせぬものは罪人でしか無い。だったか？」
そう言うと、キールの笑みが歪に歪んで行く。
「えぇ。その通りですよ。全く馬鹿馬鹿しいですよ。生まればかりの赤ん坊に義務を果たせ無いなら死ぬべきですよ？

ふざけるな！
生まればかりの赤ん坊にそんな義務があるだと！その時に気付いたんだ！平民は貴族達の下僕だ！手を握り合おうなどと下らぬ考えを持ってた私が愚かだったと！」

自分は今のキールを見て身震いした。最初見た時は女みたいに整った顔立ちをしていた。でも、今のキールの顔は怒りと悲しみと憎悪で醜く歪んでいた。そして、コイツをこんな人間にしたのは自分だと。

……自分はどんな顔をすれば良い？どんな顔をしてどんなことをしてごめんなさいと謝れば良い？
……わからない。

空には雨が降っていた。

後悔だらけのリグレット（前書き）

ようやく、本編は完結しました。この話は書くのが辛かったです。
書く事がイヤな気分になるのは初めてです。

後悔だらけのリグレット

「今から、元ゲルマニア皇帝の処刑を行う！」

トリスティン城の前の広場にてルネサンスの盟主、ヴァリエール公爵が高らかに宣言した。捕まってからの１０日間は地獄だった。ルネサンスのメンバーが殴る蹴る、時には魔法で攻撃するのだ。自分はそれを甘んじて受け入れるしかなかった。そんなことをしても、ルネサンスの人達の大切な人達は戻って来ない。それはわかっている。でも、少しだけで良い。キズが癒えるのを祈り、受け入れるしかないのだ。

キールは自分達の所から、父上を引っ張りこの処刑のために作られたステージの上まで連れて来た。そして、その下にある煮えたぎった熱湯へと突き落とした。絶叫と共に必死でもがくが直ぐに動かくなった。

ルネサンスの人達、そうじゃないを問わず皆が歓喜の声を上げた。

そして、母上、家族の皆を次々に引っ張り熱湯の中に突き落としていった。自分はそれを涙を流しながら見つめていた。

「最後に一度はトリスティンを滅ぼした悪魔、カルマの処刑を行う！」

キールは自分を連れてステージの上まで歩いてきた。……あぁ。

自分は愚かだった。貴族が悪だと勝手に決めつけて貴族を滅ぼした結果、こうなってしまった。その中、

「Дo　свидaния（ダ　スヴィダーニァ）」

キールは決して聞き逃せない言葉を口にした。ハルケギニアの共通言語ではない。地球のある国で使われいる言葉だ。

「……え……？」

呻くように後ろを振り向いた時、

トンッ！！！！！

キールは自分を突き落とした。

自分はスローモーションで遠ざかるキールの顔を見つめていた。その顔は愉快そうで、悲しそうであった。

「Дo　свидaния（ダ　スヴィダーニァ）」

心の中で、そう言った瞬間、熱湯の中に落ちた。

「ギャアアアアーーーッ！！！！！！！」

熱い！あまりの熱さに思考がそれ以外に向くのを許されない。でも、直ぐになにも感じなくなった。どうしてこうなってしまったんだよ？何処で何を間違えたんだよ？こうなるくらいだったら、貴族

アンチをしなければ良かったかな？でも、もう遅い。

失った時は戻らない。

今は、もう雨空を見ることさえ叶わない。

後悔だらけのリグレット（後書き）

自分の駄文読んで下さりありがとうございます。

最初に読んでくださる皆様に言わせていただきます。
少なくとも、自分は自身では動く気さえ無いのに、欲だけ満たそうとする怠け者を肯定する気はないです。
この駄文では、書きたいことが３つ有りました。ひとつは『自業自得』。

主人公は安易に『全ての貴族達は果たすべき義務を果たさぬ上に平民達を迫害している悪だ』と決めつけた罪を犯しました。

もう一つは『悪に堕ちた善』です。
ルネサンスの人達は全員、義務を果たしていたはずの人物でした。
ところが、主人公の安易に行なった貴族アンチのせいで大切な人達を失い悪に堕ちた人達です。

そして、残りの２つは、アンチ作家様、アンチを好きな人達へのメッセージと、問いです。

まず、主人公が受けた苦痛、ルネサンスの人達。これはあなた方が産み出そうとしていることではないでしょうか？

最後にある作家様の感想欄でも、同じ事を書きましたが
『貴族アンチが成功した世界で貴族達が生き残り、逆襲されても受け入れるのか？』です。

『権力を持つものに義務があり、果たさぬことが罪』

それなら、義務を果たしている人達にとってのアンチは理不尽です。

自分達がやった事をやり返されても文句は言えません。何故なら先に自分達がやったからです。自分がやり返されて納得出来ないならやれないとしても、それでも、『貴族アンチ』を行うのですか？

黒い炎―モンモランシーの場合（前書き）

番外編、黒い炎を書いてみました。
これは、ルネサンスのメンバー＋アルファを視点にしたものです。

黒い炎―モンモランシーの場合

……全てを奪われた。思い出も、家族も、そして、愛する人さえも。

私は燃えカスとなった屋敷を見て、そう思った。

ゲルマニアの宣戦布告、それと併発して起こった、平民達の叛乱。

このままじゃ、危ない！！

真っ先に動いたのはギーシュだった。私とケティを連れて、魔法学園から逃げた。だけど、その途中、ゲルマニア兵に見つかり、ギーシュは私達を生きさせる為に戦い死んだ。

『僕の事を想うなら、僕の分も幸せになって。』

息を引き取る寸前、そう言い残した。

私達はギーシュをその場に残すのがイヤだったが、残って死んでしまう何てギーシュへの侮蔑だ。ケティの言葉に従い逃げ出し、互いに両親が心配で一旦別行動を取ることになった。

そこで待っていたのは更なる悲しみだった。

「……あ……。」
私はその光景を見ても、涙さえ流さなかった。一度に大切なものを失いすぎて泣く事さえ出来なかった。

ゲルマニアの連中がこんなことをしていたとわかっていた。

トリスティンの貴族達とは仲が良好だし、平民達に圧政を敷いてないから、嫌われてない。平民達ではなく、貴族達でもないなら、ゲルマニアでしか考えられない。

……今の私には何も残されていない。思い出も家族も愛する人さえも何もかもをゲルマニアが奪っていったからだ。
私は飽きることなくその光景を見つめていた。私が来た時点で、火は燻っていたが、私の中で、黒い炎となって激しく燃えていた。

黒い炎―とある男の子の場合

ここは何処？私は誰？心境はまさにそれのみだった。何せ、事故で死んだと思ったいつの間にか、見知らぬベッドに寝かされていたからだ。しかも、喋ろうにもオギャアとしか出ないし。

落ち着け。深呼吸。深呼吸。とりあえず、落ち着いて話を聞いてみよう

……全然、わからね！でも！落ち着いたお陰で、身に置かれた状況も理解できた。どうやら俺は転生したらしい。しかも、端から聞こえる言葉はトリスティンとか、ガリアとか聞こえた。どうやら『ゼロの使い魔』の貴族に転生したらしい。よし、ティファニアやカトレアを俺の嫁にしてやる！待ってろ！

……無理でした。それどころか、俺の家族は皆捕まり、死刑に処されるらしい。俺もその中に含まれている模様。……酷い。酷すぎる。神様よ。俺がいったい何をした？前世でも、そうだが悪いことはいっさいした覚えがないぞ？貴族が悪いなら、俺は貴族に産まれたくはなかったぞ。恨むよ神様。

黒い炎―ヴァリエール公爵の場合

――トリスティンが滅んだ。

私の中にあるのは大切なものを失った虚無感だった。

「……カリン様。その話は間違いなく？」

「えぇ。間違いないわ。」

私が何も言えずにいると、部下のキール君がカリンに問いかける。

「ヴァリエール公爵。如何致します？」

キール君の問いに、呻くように問いかける。

「如何致しますとは？」

「このままここにいたところで、最善が有るわけでもありません。戻り、国を取り返すか、それとも、逃げてどこかで、ゆっくりと晩年を過ごすか、どちらにしますか？」

私はその問いに、答える前にカリンに問いかける。

「カリンよ。トリスティンを滅ぼしたゲルマニアの言い分は？」

「私達、貴族が平民達を不当に虐待しているから、貴族を滅ぼして平民達を解放する。それが理由だそうです。」

「そうか……。」

その答えにやるべき事を決めた。

「このまま、逃げて晩年を過ごそう。」

「よろしいのですか？」

「うむ。ゲルマニアの言い分通り、我々は平民達の扱いは良くなかったからな。それで、滅ぶなら、自業自得だ。それより、生き残った貴族達が生きる場所を作る組織を結成したい。」

その言葉にキール君が柔らかく微笑んだ。さっきの問いは私に対する試しだったのだろう。もし、ゲルマニアからトリスティンを取り返すと言ってたら見捨てられていただろう。

「付き合います。ヴァリエール公爵。」

キール君に礼を言い、新天地を探す事にした。

「何！エレオノールにルイズが！」

「はい。エレオノール様とルイズ様とエリスを発見、保護しました。」

ゲルマニアに捕まり、死刑に処されたはずの娘二人に、キール君の婚約者の女性の保護。その話に私は狂喜した。死んだはずの二人

が生きていた事実に対する喜び。しかし、二人から聞かされた話はそれを軽く吹き飛ばすようなものだった。ゲルマニアに捕らえられた男性貴族は皆死刑。その中にキール君の父親も産まれてまだ数ヶ月しかたってない弟もその中に含まれていたらしい。……そして、女性の貴族達は性の地獄に送り込まれた。その中で次女のカトレアは亡くなり、アンリエッタ女王陛下はその心が壊れてしまった。

私はその話を聞いて心の中で、黒い炎が灯り始めたのを感じていた。……ふざけるな。確かに私達、貴族は平民達の扱いが良くない人達が多い。だが、何故、そんな地獄に送り込まれなければならない？

「キール君。あの時の私の判断は甘かったと思うか？」

「…少なくとも、あの時の私なら、そうは思わなかったでしょう。」

という事は今はそう思ってないと言うことか。

「キール君。ゲルマニアを滅ぼしたい。力を貸してくれないか？」

「喜んで力を貸します。ヴァリエール公爵。」

キール君は満面の笑みを浮かべて答えた。瞳に私と同じ黒い炎を燃やして。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5160y/

最悪のBad End

2011年11月21日17時24分発行